参考資料

２０１７年9月２０日

「立山黒部」世界ブランド化推進会議委員各位

「立山黒部」世界ブランド化推進についての意見書

立山室堂山荘　佐伯　千尋

雷鳥荘　　志鷹　定義

みくりが池温泉　尾近　三郎

一の越山荘　佐伯　光昭

立山天狗平山荘　佐伯　賢輔

雷鳥沢ヒュッテ　佐伯寿一郎

アルペンルートの冬季営業等について、問題点をまとめてみましたので議論の参考にしていただきたい。

１.現状と事故事例

（１）登山者について

昨年１１月３０日に、大学の山岳部が浄土山で雪崩死亡事故が発生。　数年前にも１

１月２９日に、国見岳北面「通称大谷」で雪崩死亡事故がありました。

他にもこの季節、室堂平・天狗平・弥陀ヶ原で視界不良と猛吹雪により、方向・現在地のロストにより凍死したケースが多数あります。

中には、登山の上級者と言われるような方もおられました。

どうしても冬期間に旅客を送り込むのであれば、１１月２９日以降翌年４月全線開業日までは条例を制定して、登山者・スキーヤーを含め全員を室堂ターミナルから一歩も出さない措置をとる等の方法しかないのではないでしょか。

しかし外を見渡せば、立山駅経由大日岳・馬場島経由大日岳・黒部ダム経由立山等から入山した登山者が雪山を歩いているのに、アルペンルートを利用して室堂に来ている人間に、どんな理由付けをして登山・スキー禁止と言って受け入れてもらえるのでしょうか？

（２）キャンパーについて

アルペンルートは１１月３０日まで営業し、山小屋は１１月２６日以降閉鎖しており、雷鳥沢野営場も１１月２４日で閉鎖し、室堂ターミナル前を仮設野営場としております。その野営場でわずか５日間の間でさえ、猛吹雪で室堂ターミナルへ避難する登山者が続出しております。

甚だしくは、吹雪の日に張ったテントが雪に埋まり脱出できなくなり、携帯電話で山岳警備隊に救助を要請という事態も発生しております。

冬山経験の少ない初心者でも、交通機関を利用して簡単に厳しい冬山に来れてしまい、経験の少なさゆえの事故が増加するのは目に見えています。

また現在の運用期間の利用者は、積雪が有れば本来の雷鳥沢のキャンプ指定地でのキャンプは現実的でないため、室堂ターミナル近くの仮指定地でキャンプをしてもらっています。

キャンプ場利用者のトイレは、室堂ターミナルのものを利用してもらっていますが吹雪で行動がとれないのか、キャンプサイト近くで用を済ませてしまう利用者が後を絶たず結果として雪上の至る所に屎尿痕が残ってしまいます。

山小屋の周囲も同様で、強風からテント守るために小屋の影にテントを張った形跡と屎尿が放置されており、遣り切れない思いで後片付けに当たっています。

（３）運用方法について

現在の運行期間でも問題が有るのに、更に期間を延せばもっと大きな問題に発展するのではないでしょうか。

毎年１１月２５日前後に、室堂地区の山小屋は小屋閉めをして下山するのは立山の気

象が厳しくなることを経験上分かっているからです。

５０年以上続いている事実は、重大な意味を持っているのではないでしょうか。

実際、数年前まで４月１０日から信濃大町側から先行運行を実施しました。

しかし、問題点が出るばかりで営業しても全く効果が上がらず、失敗に終ったのを忘れたのでしょうか。

ちなみに、この問題は「積雪期利用ルール適正化協議会」で４～５年かけて行われたものですが、失敗の最大の原因は協議会委員自身が厳しい「冬の立山」の実態を知らずに話を進めたからと考えます。

冬期間の運行利用を考えるのであれば、当推進委員全員が実際に荒れた立山でその厳しさを体験されてから協議に入ってみられればと考えます。

本年５月に、文化の違いからかコミュニケーション不足なのか？香港人姉妹の行方不明騒ぎで、大騒ぎになったのは記憶に新しい出来事です。

雪の無い国からやって来る外国人対応は、街での接遇とは比べ物にならないほど大変なのではないでしょうか。

今回は、登山者等の厳冬期の危険性をとりあげて意見を述べさせていただきましたが、

他にも水・電気等ライフラインのこと、急病人・火災等に対するバックアップ体制、更には弥陀ヶ原火山の防災問題等々、検討しなければならない課題が多く残っていることを申し添えておきます。

２.ロープウェイの建設について

新規のロープウェイの建設については、人の流れが大きく変わる訳ですから、沿線関係施設等の合意なしには、新設はあり得ないものと考えます。

そもそも、立山駅から弥陀ヶ原へのロープウェイ新設計画は、中部山岳国立公園だけでなく、２０１２年に広く水辺の自然生態系を保全することを目的とする「**ラムサール条約**」の登録地区と認定されたばかりなのに、その保護地区での事業計画が巷で議論され始めているのは理解できません。

少し話は逸れますが、今年「**立山黒部ジオパーク**」構想の申請が退けられたのは、地域の理解が得られていないとの理由ではなかったでしょうか？

ラムサール条約という国際条約で認定された地域を地元が開発すれば、世界中から富山の環境保全は口先だけと思われてしまうでしょう。

従来の、桂台～室堂間道路の効率的な利用方法などの検討はなされたのでしょうか？

ロープウェイ新設有りきで、議論が進められていないでしょうか？

また、ロープウェイを作ったとしても、先のアルペンルート同様に冬期営業は出来ないと考えますが、それでも莫大な費用を掛けて作る価値が有るのでしょうか？

慎重な議論を期待いたします。

宿泊施設の整備（新規）に関する意見

立山黒部地区において、上質な宿泊施設が新たに必要という意見に対して

まずは、現況、ホテル立山、天狗平の立山高原ホテルの建設時に、上質な宿泊施設が必要ということで建設されたのではなかったでしょうか？実際にわれわれ室堂地区の施設からみれば、グレードも高く料金も高額な上質な部屋もありますが、少数の部分です。室堂地区の施設と変わらない客室の設備内容・浴室等の設備・宿泊料金のほうが多くあります。また、そうでないと、全体の黒字は確保できません。そういう意味において、明らかに競合しています。上質な施設だから競合しないという説明は成り立ちません。

そのうえで、今回、ホテル立山よりさらに上質な施設をということですが、

全室がハイグレードの客室でしょうか？ハイグレードの客室もあれば、ホテル立山、我々室堂地区の施設と変わらない価格・設備もあるのではないでしょうか？

そうでなければ、やはり全体の黒字は確保できません。そういう意味においてやはり、既存設備と競合してしまいます。

とすれば、全体のキャパシティーが問題になってきます。

結論からいえば、立山黒部地区においては、キャパシティーは不足していません。むしろ、過剰なのではないでしょうか。

過剰の理由の一つは、立山高原ホテル・弥陀ヶ原の立山荘、等、営業が赤字なのでは？明確な現実です。室堂地区においても、過去には、営業が成り立たず、倒産した会社もあります。キャパシティーが過剰の証です。

過剰な理由のもう一つは、室堂地区５軒を例にとれば、夏のハイシーズンで

も、どこかしら１～３軒は個室が空いています。ましてや、秋・春はなおさらです。代表的な例として、立山室堂山荘の客室稼働率を例示します。総客室数は３７室２階建てです。以下は、平成２８年度の４月１６日より１１月２４日の泊りまでの客室稼働率です。

４月	５３．５％	５月	３７．６％	６月	３３．４％	７月	６０．１％
８月	８７．０％	９月	６３．８％	１０月	５０．０％	１１月	１１．３％

一番近くて便利といわれる施設でさえ、この数字です。他の施設のことも考慮すれば、最盛期の８月でも、余裕があると言えます。

以上の理由から、立山黒部地区の宿泊施設のキャパシティーは不足していません。新規施設（新たな業者による）は不必要です。これ以上の上質な施設も含め新規施設は、立山駅から黒部湖まで必要ありません。

また、世界ブランド化の本質は、開発だけなのでしょうか？基本的な考え方として、自然公園は入り口（立山駅周辺）で様々な案内機能、商業機能をもたせ。（例えば、立山カルデラ砂防博物館のように）自然公園の中はそこに昔から存在する山小屋等を利用し、なるべく自然に負荷をかけないのが基本ではないでしょうか。白川郷も何故、今、評価が高いのでしょうか。合掌作りがそのまま開発されずに残っているからではないでしょうか？現状、そういう意味でも、これ以上の施設は不要に思われます。

以上ご理解の程、お願いいたします。